やったぜ日本一!!

そして、その瞬間を迎える

ソアラは北バンクに消えた。エキゾーストだけがわずかに耳に残る。新たな記録が出るか？　ピット前の視線は全て南バンク出口に注がれている。

「来たっ!!」1人が叫ぶ。風切り音と排気音が折り重なりながら我々の前を通過し計測ポイントに飛び込む。"速い"はっきりとそう思った。今度は計測班に視線が注がれる。

計測方法は100m区間の通過タイムにより出される。タイムは1秒164。カウンターにはそう表示されている。スタッフの1人が「出たっ」と言った。幾台ものクルマの最高速を計測しているだけに本能的に出た言葉だろう。すかさず1秒164で系数360で割る。309・278、そうカウントされている。「サンピャクキューテンニーナナハチ！」

一瞬の沈黙の後、ドッと歓声がわく。「やったー！」すぐさまドライバーの井上選手にこれを知らせるため、バックストレッチでボードを持ち待機するスタッフにトランシーバーで報告する。「3・0・9」この3つの数字がボードに入る。井上選手駆るソアラが来た。ボードの数字が読みとれたらしく軽く手を挙げて答える。

いよいよトラスト・ソアラの凱旋だ。ペースダウンをしてピットロードに入ってくる。誰かれ構わずソアラに集まる。シートベルトを外し井上選手がドアを開ける。"バチバチ"拍手が起こる。全員が拍手を贈っている。この拍手はドライバーである井上選手、トラスト・ソアラ、そしてその立て役者である2人の男に贈られたものでもある。

この拍手の後、言葉で言い表わせきれないほどの第2のドラマの幕開けの瞬間でもあった。この第2のド

「ヤッタ！と同時に複雑」
——ドライバー　井上晴男——

「トラストのソアラはパワーもあったし、強いGも感じたヨ。途中で一回ふけなくなる以外は素直に伸びてくれたしね。4速で7000回転まで引っ張ったんだけど、ホント309km/hの体感があったネ。裏のボードを見た時に「ヤッタナ！」って思ったけど、ロータリーの記録も抜かれたんで複雑だよ。でも、自分の仕事をやり終えたって感じだネ。HKS千葉のZは、憎らしい野大がいなければ……。パワーも十分だし、次の機会も十分に期待できるよ」

「ウチらもやるっきゃない」
——トライアル　牧原道夫——

「自分とこのクルマのセッティング中やったから、その瞬間は知らんかったけど、日がたつにつれてクヤシイ！　と闘志が湧いてきたね。でも正直言って、ソアラが出るとは思わ